様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２７７４

研究課題名（和文）国際共修カリキュラムのための「共通語としての日本語・英語」使用実態・意識の調査

研究課題名（英文）Japanese and English as Lingua Francas (JLF/ELF) for the International Co-learning Curriculum: An Investigation into their Current Student Use and Awareness

研究代表者
竹井　光子（TAKEI, MITSUKO）

広島修道大学・国際コミュニティ学部・教授

研究者番号：８０４１２２８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本の大学において，課題解決を目的とする協働作業の中で日本人学生と留学生が学びあう国際共修カリキュラムの導入が盛んである。その授業設計や日本語・英語教育との連携方法への示唆を導き出すことをねらいとして，接触場面で使用される「共通語としての日本語（Japanese as a Lingua Franca）」および「共通語としての英語（English as a Lingua Franca）」に焦点を当て，母語話者および学習者のインターアクションの実態を言語使用の語用論的分析から明らかにするとともに，フォローアップインタビューにより共通語（JLF/ELF）に対する態度や意識の解明を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多文化共生社会の推進への関心が高まる中，協働活動を通して留学生と日本人学生が互いに学びあうことをねらいとする「国際共修」が，大学教育におけるグローバル人材育成の一環として注目されている。国際共修の場で起きる接触場面のインターアクションの言語使用の実態やその背景にある意識を解明することは，グローバル社会で広く求められている異文化間対応能力やコミュニケーション能力を育成するための教育的示唆を提供することにつながる。さらに，外国語としての日本語教育・英語教育との連携を強めるための方策を検討するという点で，日本における外国語教育および異文化間コミュニケーション教育に寄与する点が大きいだろう。

研究成果の概要（英文）：International co-learning, where local and international students are expected to learn from each other while working together on a given task, has been gaining popularity at Japanese universities. This research project aims to examine the pedagogical implications in two areas: first, to enhance international co-learning curriculum designs, and second, to effectively integrate this co-learning within the Japanese and English as foreign language courses. With focus on Japanese and English as Lingua Francas (JLF/ELF) used in contact situations in the context of such international co-learning, we attempted to explicate local and international students' language use and awareness, as first-language speakers and as language learners. To accomplish these ends, we analyzed their interactions and follow-up interviews. Findings of those analyses provided insights for the future development of successful international co-learning and English and Japanese as foreign language courses.

研究分野：言語学

キーワード：国際共修　接触場面　談話分析　リンガフランカ

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９，ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の学術的背景として以下の４つを挙げることができる。

(1) 大学の国際化推進への要請が強まる中，グローバル人材育成の一環として，留学生と日本人学生が協働を通して学びあう「国際共修」が大学教育において注目されており，共修カリキュラム（正課）や共修プログラム（課外）での具現化が各大学で進むとともに，教授法の確立に向けた動きもみられる（末松,2014)。

(2) 世界のさまざまな地域からの留学生が集う日本の大学における共修の場で使用される言語として,「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca: JLF)」と「共通語としての英語（English as a lingua franca: ELF)」が考えられる。リンガフランカ研究の分野においては, ELF 研究が先行しているが, JLF 研究も日本の大学の国際化の潮流の中で注目されつつある（Ikeda & Bysouth, 2013)。

(3) 母語話者と非母語話者がインターアクションする接触場面研究は，日本語学習者の言語使用に焦点を当てつつ,日本語教育の枠組の中で論じられることが多い(宮崎･マリオット 2003)。

(4) 外国語教育としての日本語教育と英語教育は，外国語教授法理論や言語習得理論などの基盤を共有しつつも独立して論じられることが多く，両者の双方向的な連携を試みる研究は多くない。

これらの背景を踏まえ，言語学や異文化間教育を専門分野としつつ国内外の各所属機関で国際共修,日本語教育,英語教育に関わる 8 名の研究者が一つの研究組織として連携することで，各教育現場に還元できる成果を見いだすことを目指すこととした。特に，理念的には共通点を持ちながら独立して論じられることが多い，リンガフランカ研究（英語中心）と接触場面研究（日本語中心）の双方からの知見を互いに融合しつつ，言語使用の実態や傾向だけでなく，言語使用者としてのアイデンティティの形成や変容を中心とする意識レベルまで踏み込んだ調査を試みることとした。

２．研究の目的

本研究の目的は，グローバル人材育成の一環として注目されている日本人学生と留学生が共に学ぶ国際共修カリキュラムにおける「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca: JLF)」および「共通語としての英語（English as a lingua franca: ELF)」の使用に焦点を当て,共修授業における JLF, ELF 使用者としての経験の効果および課題について探ることである。国際共修での接触場面におけるインターアクションの実態を言語使用の語用論的分析から明らかにするとともに，フォローアップインタビューにより共通語(JLF, ELF）に対する態度や意識の解明を試みる。これらの分析結果から，国際共修カリキュラムの授業設計や日本語教育・英語教育との連携方法への示唆を導き出すことをねらいとした。

３．研究の方法

本研究は，国際共修カリキュラムの授業設計への教育的示唆を得るために，JLF, ELF 接触場面でのインターアクションにおける言語使用の実態や特徴，共通語への意識を探る調査を行うことを目的とした。そのための方法として，(1)接触場面の会話データの収集，(2)フォローアップインタビューの実施，(3)会話およびインタビューデータの書き起こし，(4)言語行動と意識の分析，(5）考察，の段階を取ることとした。

調査は，2016 年 6 月～2017 年 6 月に日本国内の大学において，日本人学生，学部留学生・交換留学生 18 名（延べ人数）を調査参加者として行った。まずは，言語行動の談話的・語用論的特徴を見いだすための会話データを収集するために，国際共修授業の疑似的場面（課題解決型 3 人会話）を設定した。ここで与えた課題は，活発なグループインターアクションが期待できる身近かつ現実的な内容として,「附属高校から大学体験の目的で来学する女子高校生 10 名のためのプログラム内容（キャンパスツアーなど）を計画する」こととした。10:00（出迎え）から 15:00（見送り）までの計画書（スケジュール）を 30 分程度で協議して作成することを求めた。

国際共修におけるインターアクションは，その参加者の組み合わせと使用言語によってさまざまな場面が起こりうるが，本研究ではリンガフランカ研究と接触場面研究を融合させて，それらの場面を「JLF 相手言語接触場面",「JLF 第三者言語接触場面",「ELF 相手言語接触場面」,「ELF 第三者言語接触場面」と呼ぶこととした。この 4 つに加えて，比較のためのベースとして日本語母語話者（Japanese Native Speaker:JNS）を対象とする「JNS 母語場面」も設定し，調査を行うこととした。

疑似的場面での調査参加者には, 調査内容を説明した後に許諾（研究協力の同意書への署名）を得て，各場面における会話をＩＣレコーダー，ビデオカメラ，ミーティングレコーダー（4 方向録画）を用いて録音および録画を行った。収集した会話データ（3 人会話）は，計 9 グループ分（JNS 母語場面×2, JLF 相手言語接触場面×2, JLF 第三者言語接触場面×2, ELF 相手言語接触場面×2, ELF 第三者言語接触場面×1）で，総録画・録音時間は約 400 分である。調査参加者は，授業などで声かけをした学部生および交換留学生で，その第一言語は日本語・中国語・韓国語・ベトナム語・ロシア語・英語である。うち，留学生の日本語レベルは，調査時に日本語能力試験 N3～N1 の範囲であった。

録画・録音データのうち，日本語データ（6 グループ分）は書き起こしを行い，発話の分割

および途中あいづちの特定を行った。発話分割は，一つの発話機能を持つ節構造を発話単位と定義して行った。途中あいづちは,「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」とするあいづち表現の定義（メイナード 1993：58）にもとづき，相手の発話を促す以外の発話機能を持たない「うん」「はい」「へえ」「あー」など表現と定義して抽出した。データのうち，前後の雑談部分は除き，課題遂行作業部分のみを分析対象とした。日本語データの概要を表 1 に示す。

表 1：　日本語データの概要

場面	分析対象時間（分）	発話総数	途中あいづち総数
JLF 第三者言語接触場面 [1]	46	990	190
JLF 第三者言語接触場面 [2]	31	663	57
JLF 相手言語接触場面 [1]	25	429	32
JLF 相手言語接触場面 [2]	21	515	31
JNS 母語場面 [1]	28	854	134
JNS 母語場面 [2]	28	785	41

英語データは，録音された会話のすべてについて Jeffersonian Transcription 化を専門家に委託した。表 2 にその量的概要を示す。

表 2：英語データの概要

場面	録音時間（分）	行数
ELF 第三者言語接触場面 [1]	45	1264
ELF 相手言語接触場面 [1]	44	1715
ELF 相手言語接触場面 [2]	64	2091

また，課題作業終了後の数週間以内に，調査参加者に対して半構造化フォローアップインタビューを実施した。インタビューはＩＣレコーダーによる録音を行い，書き起こしを行った。

収集と整備が完了したデータは，研究組織内で共有し，データに関する意見交換会を経て，各自の言語学的・教育学的関心に基づくテーマ設定をして，個人または共同による分析作業に移った。

４．研究成果

初年度から第二年度にかけて収集および整備を完了したデータは,「各場面の言語行動の特徴や傾向を探ることで国際共修授業の設計や運用の方法などに関する示唆を得ること」を主たる目的として研究組織内で共有し，さまざまな視点から言語行動の分析を行った。

JLF 接触場面データを用いた成果発表の主たるものとして，第三年度に【効果的な国際共修カリキュラム構築のための「共通語としての日本語」話者の言語行動の分析】と題して組んだパネルセッションを出発点とする一連の研究発表がある。その中で，竹井・吉田（2018）は，3 つの場面グループの発話数の割合や途中あいづち出現数から，発話数割合の均等性と共話的やりとり（母語場面），上級学習者による主導や，消極的な聞き手行動（第三者言語接触場面），母語話者による主導的役割（相手言語接触場面）などの特徴や傾向を示した。

下條（2018a,b）は，スピーチスタイルに着目し，3 つの場面における普通体と丁寧体の使用傾向を調査した。母語場面では普通体と丁寧体を使い分けているが，相手言語接触場面では母語話者リーダーがより普通体に傾くこと，第三者言語接触場面では丁寧体を使うことでリーダー的役割を強調して課題を遂行することを報告した。

藤原（2018）は，会話における情報要求に着目し疑問表現の使用傾向について 3 つの場面の比較を行った。結果として，母語話者は，母語場面と比べて相手言語接触場面では疑問表現を多用すること，一方で学習者は，第三者言語接触場面では疑問表現を使って会話への参加を試みているが,相手言語接触場面においては疑問表現を使った情報要求が少ないこと,すなわち，母語話者，学習者ともに場面によって役割が変化することを報告した。藤原（2018b,2019）では，疑問表現の中で母語話者の多用が見られた文末表現の「かな」に着目し,「かね」とも比較しつつさらなる分析を行った。

渡辺（2018）は，談話展開（話段）を分析しつつ，提案の発話に着目して母語場面と第三者言語接触場面での比較を行った。結果として，母語場面では，提案の可決・否決に至る発話連鎖パターンが見られる一方で，第三者言語接触場面では，提案の可決・否決が決まる前に他の提案や話題に推移してしまう傾向があることを指摘した。

これらの接触場面における言語行動の分析結果を受けて，竹井（2018）では会話参加者が担

っている役割に注目した。さらに，竹井・吉田（2018）では，言語行動の特徴をインタビューから垣間見られる意識と関連づけて考察を行った。結果として，フォローアップインタビューでの発言が実際の会話データ分析の結果を裏付けていることがわかった。すなわち，母語話者の意識が，実際の言語行動に反映されていると言える。一方，親疎度や共有意識とスピーチスタイルの選択との関係，ジェンダー意識などの言語・文化規範からの逸脱への違和感が，日本語学習者に観察された。竹井（2019）では，母語話者の思いや意図に反して違和感や戸惑いが生じたこれらのケースに焦点をあて，さまざまな規範からの逸脱に起因すると思われる事例から見えてくる相手言語接触場面におけるインターアクションの意義や課題について考察し，国際共修への示唆とした。

ELF 接触場面データについては，JLF データほどの活用に至ることはできなかったが，Nogami & Takei (2017)では，日本人学生の言語行動，態度，意識に注目し，ELF 接触場面による経験が JLF 接触場面に与えた影響について報告した。

加えて，発話とジェスチャーとの関係に焦点をあてた発表（川上 2017），国際共修の実際の授業運営に関する発表（川上 2018）や地域交流と関連づけた発表（藤 2018）などを行うことができた。

これらの分析結果から，各場面における言語行動の特徴や傾向，その背景にある母語話者および学習者の意識の解明の糸口を見出すことができた。目標であったデータ分析結果から得られる教育的示唆を国際共修カリキュラムの実践の場へ還元するための方策を検討する素地を提供することができたと考えているが，より実践的な検討については次の課題研究に託したい。また，「共通語としての日本語（JLF)」データの分析が中心的となったが，収集済みの「共通語としての英語（ELF)」データ分析についてはやや不十分であった。本研究期間中にさらなる ELF データの収集（異なる設定場面）ができているので，JLF・ELF 両データの比較，JLF・ELF 接触経験の相互作用性の検討についても，今後の課題としたい。

＜引用文献＞

末松 和子(2014)．キャンパスに共生社会を創る－留学生と日本人の共修における教授法の確立に向けて－．ウェブマガジン『留学交流』Vol.42，pp.11-21.

Ikeda, K. & Bysouth, D. (2013). Japanese and English as Lingua Francas: Language Choice for International Students in Contemporary Japan. In Harberland, Lønsmann and Preisler (eds.), *Language Alternation, Language Choice and Language Encounter in in International Tertiary Education*, pp. 31-52. Springer Science & Business Media.

宮崎 里司・ヘレン・マリオット（共編）(2003)．接触場面と日本語教育－ネウストプニーのインパクト.明治書院.

メイナード，K. 泉子（1993）会話分析. くろしお出版.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①竹井 光子・吉田 悦子(2018)．国際共修カリキュラム（相手言語接触場面）における母語話者の意識と役割．CAJLE 2018 Conference Proceedings，274-283．カナダ日本語教育振興会．

②下條 光明 (2018b)．課題解決型会話におけるスピーチスタイルシフト－日本語母語話者と日本語学習者の比較－．CAJLE 2018 Conference Proceedings，244-253.カナダ日本語教育振興会．

③藤原 美保 (2018b)．接触場面で使用される「かな」と「かね」の分析．CAJLE 2018 Conference Proceedings，69-77．カナダ日本語教育振興会．

④川上 ゆか (2017)．意思決定に至る紆余曲折－タスク達成型接触場面における発話とジェスチャーの関係．第１６回フランス日本語教育会シンポジウム論文集．

⑤竹井 光子 (2016)．地域つながるプロジェクト：留学生参画の成果と課題．CAJLE 2016 Conference Proceedings，257-262．カナダ日本語教育振興会．

⑥野上 陽子 (2016)．共通語としての日本語への意識調査：国際共修の場におけるインターアクションを通して．CAJLE 2016 Conference Proceedings，221-229．カナダ日本語教育振興会．

〔学会発表〕（計 12 件）

①竹井 光子 (2019).相手言語接触場面のインターアクションにおける母語話者の意図と学習者の戸惑い．2019 AATJ (American Association of Teachers of Japanese) Annual Spring Conference，Denver，March，2019.

②吉田 悦子 (2019).発話連鎖とターンからとらえる合意形成プロセスの分析：「接触場面」と「母語場面」を比較して．2019 AATJ Annual Spring Conference，Denver，March，2019.

③藤原 美保 (2019).日本語学習者と日本語母語話者の文末表現「かな」の使用の分析．2019 AATJ Annual Spring Conference，Denver，March，2019.

④藤 美帆 (2018)．地域学習としての国際共修の可能性 －大学周辺地域を題材としたプロジェクト型学習の事例から－．留学生教育学会第 23 回年次大会．広島大学，2018 年 9 月．

⑤竹井 光子・吉田 悦子(2018)．国際共修カリキュラムへの教育的示唆を導き出すための母語

場面・接触場面における会話データの収集と分析. 2018 AATJ Annual Spring Conference, Washington, DC, March, 2018.
⑥下條 光明(2018a).日本語母語話者によるスピーチスタイルシフト―母語場面と接触場面の比較―. 2018 AATJ Annual Spring Conference, Washington, DC, March, 2018.
⑦藤原 美保(2018a).母語場面と接触場面における疑問表現の比較. 2018 AATJ Annual Spring Conference, Washington, DC, March, 2018.
⑧渡辺 文生(2018).話段の展開的構造からとらえる母語場面と接触場面の比較. 2018 AATJ Annual Spring Conference, Washington, DC, March, 2018.
⑨川上 ゆか (2018). 「多文化理解はできたのか？」―国際共修クラスの運営と実際―. 言語文化教育研究学会第4回年次大会. 立命館大学 衣笠キャンパス, 2018年3月.
⑩Yoko Nogami (2017). A Case study on Japanese university students' awareness on successful ELF communication: Through interactional experiences in multicultural co-learning environment. JACET 56th International Convention, Aoyama Gakuin University, August, 2017.
⑪Mitsuko Takei, Jana M. Townsend, Keith C. Hoy & Daniel James (2017). Combining CLIL and ELF in multicultural project courses for mixed L1 students: Current practice and student perceptions. JACET 44th Summer Seminar: English as a Lingua Franca (ELF) in the globalized world: research and implications for practice, Waseda University, August 2017.
⑫Yoko Nogami & Mitsuko Takei (2017) Investigation on awareness of speakers of English and Japanese as lingua francas: Through interactional experiences in multicultural co-learning environment in a Japanese university.ELF10, University of Helsinki, June, 2017.

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：渡辺　文生

ローマ字氏名：WATANABE, Fumio

所属研究機関名：山形大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00212324

研究分担者氏名：吉田　悦子

ローマ字氏名：YOSHIDA, Etsuko

所属研究機関名：三重大学

部局名：教養教育院

職名：教授

研究者番号（8桁）：00240276

研究分担者氏名：野上　陽子

ローマ字氏名：NOGAMI, Yoko

所属研究機関名：関西学院大学

部局名：法学部

職名：助教

研究者番号（8桁）：90733999

研究分担者氏名：川上　ゆか

ローマ字氏名：KAWAKAMI, Yuka

所属研究機関名：広島修道大学

部局名：人文学部

職名：講師

研究者番号（8桁）：00778805

研究分担者氏名：藤　美帆

ローマ字氏名：TOU, Miho

所属研究機関名：広島修道大学

部局名：国際コミュニティ学部

職名：講師
研究者番号（8 桁）：40778825

(2)研究協力者
研究協力者氏名：藤原　美保
ローマ字氏名： FUJIWARA, Miho

研究協力者氏名：下條　光明
ローマ字氏名： SHIMOJO, Mitsuaki

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。